

平成 27 年度 第 2 回みたけ創生有識者会議

日時	平成 27 年 9 月 3 日(水) 10 時 15 分～	
場所	御嵩町子育て支援センター ぽっぽかん	
委員	出席者	黒田晃司、永谷嘉規、永井明子、小林智尚、水内智英、谷口清治、齊藤公彦、柴田永治 順不同敬称略
	欠席者	なし
事務局	町長 渡邊公夫 総務部長 寺本公行 企画調整担当参事 葛西孝啓 企画課 各務元規、高木雅春、川上敏弘	

1 開会

(事務局)

皆さん、おはようございます。本日は、お忙しい中、また遠いところお集りいただき、ありがとうございます。定刻になりましたので、只今から、「第 2 回みたけ創生有識者会議」を開催させていただきます。本日、司会と進行を務めさせていただきます企画課の各務と申します。よろしくをお願いいたします。それでは、初めに開会にあたり、町長より挨拶を申し上げます。

2 町長あいさつ

(町長)

皆さん、おはようございます。お忙しい中、お集りいただき、ありがとうございます。ぜひ、人口対策も含めて議論いただければと思います。

本日、会議を行う施設は、御嵩町にとって思わぬ好評を博している「子育て支援センターぽっぽかん」です。お金をかければ建物をつくることはできますが、中身が大事です。私は、大家族で育ってきましたが、自分の育った環境は、決して悪くなかったと思っています。最近、核家族化が進んでいることもあり、子どもたちが、おじいちゃん、おばあちゃんとふれ合う機会が少ないように思います。そこで、3 世代が利用できる施設にすればどうかというアイデアででき上がったのが「ぽっぽ母べえ」というお母さん方のボランティアです。最初は、なかなか手が出せなかった部分もあるのですが、最近は相談や子守り等もしていただけるようになりました。大変、評判が良く、毎年 2 万人を超える方に利用していただいています。利用者の半分近くが町外の方で、満員になって利用できないという問題もあり、悩ましいところでもあります。ただ、御嵩町の子どもたちが可児市や、美濃加茂市や、加茂郡でお世話になることもあると思いますので、御嵩町の子ども限定というのもいかなものかという思いもあり、そのまま利用していただいております。

また、昨年、ここから車で 3 分程のところ、児童館が完成しました。「ぽっぽかん」は、就学

前の子どもが利用できる施設で、就学すると「ぼっぼかん」では遊べないというルールがあります。児童館は、小学生が遊ぶことができる施設です。

私自身は、他の市町との差別化をしながら、御嵩町は子どもに手厚い施策をしているとアピールしていきたいのですが、段々差別化ができなくなってきたのが悩みの種です。可児市の方に「御嵩町には、ぼっぼかんのような施設があつていいね」と言われると、それなら御嵩町に住んでくださいと言いたいのですが、なかなかそうはいきません。

この会議には、色々な分野の方に参加していただいておりますので、それぞれの専門からのご意見を頂戴できればと思います。また、逆に「プロは素人には絶対に勝てない」という言葉もあります。プロであるが故に、否定的なことを言うってしまうということもあると思います。その両方を活かしていただければと思います。第1回の会議も、非常に充実した時間となりました。本日も、自由闊達な意見交換ができればと思っておりますので、よろしく願いいたします。

(事務局)

ありがとうございます。今回は、第2回目の会議になります。前回、公務で出席できなかった岐阜県庁の永井様に、本日からご参加いただいております。永井様、自己紹介をお願いいたします。

(永井委員)

岐阜県庁の防災課技術課長補佐兼防災支援係長の永井と申します。前回は、御嶽山の搜索対応のため欠席させていただきました。こちらを優先させていただくべきだったのかもしれませんが、申し訳ございませんでした。7月29日から8月7日まで、準備や後片付けも含めておよそ2週間、昨年9月の噴火による行方不明者の方の搜索を岐阜県を挙げてさせていただきました。6名の方のうち、1名の方を岐阜県隊が見つかることができました。本当は、全員見つけられれば良かったのですが、そのような中で1名だけでも見つけて差し上げることができました。残念な思いはありますが、やれるだけのことはさせていただきました。

私自身は、元々大学では都市計画を専攻しておりました。それに関連する仕事がしたいと思い、岐阜県庁に入りましたが、建築や都市計画、御嵩町にもご縁がある首都機能移転等の仕事をし、観光等の仕事を経て、今は防災の方におります。昨年、御嵩町の企画課の和田さんに、県庁のうちの係に来ていただき、戦力として働いていただいております。

先ほども話をしていたのですが、岐阜県は災害が多いところです。特に昨年は、災害のオンパレードでした。豪雨があり、春には群発地震、秋には御嶽山の噴火、冬には大雪が降りました。色々なことがあり、大変な1年でした。そのような中で、人材育成、「災害対策基本法」の対応等をしております。これらの経験の中から、少しでも皆様のお役に立てるような意見を出させていただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。

(事務局)

ありがとうございます。先ほど、町長から話がありましたが、本日も副町長、各部長、議会議員、若手職員が同席しておりますので、ご了承の程、よろしく願いいたします。

では、町長からも案内がありましたが、第2回目の会議は、この「ぼっぼかん」で開催させて

いただきます。「ぼっぼかん」は、御嵩町の子育て支援の拠点であり、遊びの紹介をしたり、同年代の親御さんの情報交換の場になったり、子育ての悩み、不安の相談支援等を行っております。また、民間の団体である「ぼっぼ母べえ」の話もありました。後ほどコーヒー等を出させていただきますが、体に優しいお菓子等を作って、子どもたちにおもてなしをしてくださっている方々です。世代を超えて子育ての支援をしていくことを目的に、ご協力いただいております。

今回は、このような御嵩町の取り組みを実際に見ていただきながら、子育てや教育についての戦略を深めていただき、御嵩町のレベルアップが図れればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

ここで、一つ事務局より提案をさせていただきます。第1回目の会議で、座長を第2回目で決めさせていただきたいとお話いたしました。ただ、前回の協議が大変有意義なものであったということもあり、本日の2回目と、次回の3回目については、前回と同様、町長を中心に皆さんで自由に意見交換をしていただく形を取らせていただきたいと思います。具体的な戦略の策定や、戦略ができた後のフォローアップについては、座長さんを中心に進めさせていただきたいと思っております。3回目の会議の最後に、座長を決めさせていただきたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

<異議なし>

ありがとうございます。では、そのように進めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

3.【報告】

(事務局)

では、早速、資料に基づきまして、担当から簡単にご説明をさせていただきます。

<資料に基づき、事務局より説明>

(町長)

私は民間から町長になりましたので、職員も戸惑うことが多かったと思いますが、最近は慣れてきてくれたように感じます。

第1回目の会議において、柴田委員から長久手市の「ゴジカラ村」の話が出ましたが、私も何年前に「ゴジカラ村」に行ったことがあります。最初は子育て支援の関係の施設として、古い木造の住居を移転させたということですが、行政に申し込みをしたら、子育て支援の施設では駄目だと言われたため、知恵を絞って、老人の生きがい関連の施設に変更したら許可が下りたそうです。私はいつも職員に、こじつけでも何でもいいので、相手を納得させる技術を磨いてほしいと言っています。普通の行政マンなら、子育て支援の施設として認められなかったところで終わっていたと思いますが、民間では、そこでどうするべきかを色々と考えます。そのように、一步進んだことが、これからは必要になってくると思います。御嵩町も、今まさに、そのような発想で

交渉をしていかないと、財源を生むことはできないだろうという感覚でおります。今日は、若い職員もおります。目から鱗が落ちるような話を、民間という立場からしていただいたり、県ではこのような話なら乗りますよという観点からのご発言をいただければ、ありがたく思います。

では、今日は資料5から始めさせていただきます。妊娠から出産、保育、学校までの流れの中で、その第一歩のところから取り組んでいこうということで、2年前から特定不妊治療の助成を始めました。ただ、妊娠の前に、結婚ではないかというところで、少し引っかかっております。永谷委員は、パートナーが決まってから御嵩町にIターンしていただいたのですが、もしパートナーが決まっていなかったらどうでしたでしょうか。Iターン後に出会いはあったと思いますか。

(永谷委員)

Iターン後の出会いは、多分、厳しかったのではないかと思います。私の周りにも、農業者の友人が結構いるのですが、今も農業を続けている人は、パートナーを見つけて新規就農されている方が多いです。そうすると長続きすると周りからもよく言われます。就農後にパートナーを見つけるというパターンは、なかなか難しいようです。岐阜県では分かりませんが、私の出身である栃木県では、7年前に農業者を女性と会わせるお見合いパーティーをしようという話もありました。ただ、農業者以外の方の場合は、また話が変わるかもしれません。

(町長)

お子さんはいらっしゃるのですか。

(永谷委員)

子どもはまだいませんが、欲しいとは思っています。

(町長)

どのような状況なら、安心して子どもを産み、育てられると思いますか。

(永谷委員)

我が家の場合、妻にまだやりたいことがあり、子どもができると、それを続けることが少し難しくなります。そのため、少し落ち着いてからを考えています。私は、今すぐでも欲しいなと思っています。経済的なこともあります。その辺りは何とかかなるかなと思っています。私の希望としては、3人欲しいですね。2人でもいいのですが、3人いる方が多様性というか、色々な役割が出てきて面白いのではないかと思います。

(町長)

3人いると、派閥ができ、調整能力が磨かれるかもしれませんね。

子どもを預かる立場にいらっしゃる齊藤委員は、御嵩町に住むことが現実的ではないというご感想をおっしゃられていたと思います。永谷委員とは立場が違うところで考えられていると思いますが、いかがでしょうか。

(齊藤委員)

子どもを産み育てることについて、今現在、御嵩町で子どもを育てるとなると、子どもが大きくなったときに、例えば、小学校、中学校まではいいですが、高校や大学、就職までを考えると、ここで育てていくことには若干無理があるようにも感じます。教育の質の向上をもっと図り、それによって誘致に乗ってくる企業が出てくるということになれば、御嵩町での子育ても現実的になるのかなと感じます。

(町長)

情報を発信するという事は、とても難しいことです。今は、情報を入手しようと思えば、色々な形でできるのですが、情報の受け手は、自分の好きなことだけを受け取る取捨選択ができるため、興味のないことは、全て削除することができます。そのような中で情報の発信は、とても難しいです。働くところがない、自分に見合った企業がない、自分が一生懸命努力して高い学歴を身に付けたとしても、御嵩町ではそれを活かすところがないと言われたら、黒田委員はいかがでしょうか。

(黒田委員)

今回いただいた資料にも、「御嵩町には働く場がない」というご意見が多く出ていたと思います。東海化成工業では直接雇用の従業員が約500名います。その中の15%が愛知県から通っています。残りの85%のうち、御嵩町在住の方は約90人で20%です。一番多いのは可児市の方です。皆さんの働く場がないというご意見と、東海化成工業としては本来なら近場の方に来ていただければいいという思いとのギャップがあります。町の方には色々ご指導いただいて、これからの採用活動につなげていきたいと思っています。いい会社というものを、皆さんはどのようにお考えなのかということをお聞きしたいなと思います。東濃高校にお邪魔したときにも、色々とお伺いするのですが、知名度なのか、将来性なのか、安定した生活ができる企業体系なのか、育休制度なのか、それらを総合して話を進めないと、断片的に見ても難しい部分があると思います。

(町長)

情報が提供し切れていないということは感じます。豊精密工業は、ドイツとスイスと日本の3社しかないという技術を持っています。色々見てみると、御嵩町には非常に優秀な企業があるのですが、可児市の工業団地に行きたがる人が多くなっています。勉強しても、御嵩町で就職する場がないと、最初からそのような頭でいる子どもが多いように思います。私が卒業式等の挨拶で、「御嵩には、あなたたちがもっと勉強しないと入れない優秀な会社がたくさんある」ということを言ったりもしています。今後、情報の発信の仕方を研究していきたいと思っています。平芝工業団地やグリーンテクノみたけの企業に、そのようなことを具体的に伝えていきたいと思っています。例えば、従業員募集の旗をつくるだけでも違うのかなと思います。

経済的なところから支えていくという意味では、金融関係としては、どのようなお考えなのでしょうか。

(谷口委員)

おっしゃられる通り、御嵩にはいい企業が多いと思います。働いていらっしゃる方は満足されているのではないのでしょうか。PR、情報発信というお話が出ましたが、工業団地と、一般住民の接点がありませんのではないかと思います。企業と民間、町、住民の接点をいかに作るかが大事かと思えます。工業団地にお勤めになられる方が、意図的にPRをしようと思ってもなかなか伝わらないのが事実だと思います。まして、町というのはまとまったエリアなので、口コミで情報が広まるように日常の世界で接点を持てればいいのではないのでしょうか。このお金がもっと地元に着るといいのと思います。落ちるといって嫌らしい意味合いに取られるかもしれませんが、それが人とのふれ合いであり、生活とのふれ合いであると思います。今は週に2日はお休みなので、可児市や名古屋市に行かず、お金を地元に着としていただけるよう、地元で過ごせる時間を作るいい方法がないかと思います。

(町長)

毎月、第3金曜に「エコビアガーデン」というイベントをしています。グリーンテクノみだけの企業の経営者の方が、「御嵩町は赤ちょうちんもない」と言われたところから始まりました。また、8月の第1週に開催している夏祭りには、工業団地の方にも参加してもらっています。他にも、地元の商工会と工業振興会の合同の勉強会や懇親会をしております。ただ、それがモノになったかどうかは、掴み切れていないのが現状です。情報は口コミが一番信頼できるということもあると思います。その点、行政がどう関わっていくか、今後知恵を絞っていきたいと思います。

若い学生と関わられている小林委員にお聞きしたいのですが、今の学生はどうしたいのでしょうか。どのような企業で働いて、どこへ行きたいのでしょうか。

(小林委員)

私の専攻は土木工学のため、地元志向が強い学生が多いですね。県や市、町等や、地元の建設業に勤める学生が多いです。世界的にも、日本全体でも英語ができて当たり前という風潮ですが、意外に私たちの就職した場所では英語は使われないことが多いです。一方で、化学や機械の分野になると、世界で仕事をしようということになるため、英語が使えるのが当たり前どころか、日本にいらなくてもいいだろうというレベルです。

学生と話していて、いつも思うのが、私は埼玉出身のためあまり詳しくなかったのですが、中部地方は非常に住みやすいところではないかということです。学生も、意外にこの地域から出ていかないように思います。御嵩町に限定した話ではないのですが、私はむしろ、学生に「こんなところにいるのではなく、外に出て武者修行をしてこい、最後に倒れるときは帰ってこい」ということを言っています。上手く言えないのですが、この地域でずっと生まれ育って、結婚して、死んでいくという時代ではないのではないかと個人的には思います。もちろん、郷土愛は持っているのですが、自分のフィールドとして出生したところだけだと、自分で職業を選ぶ、自分で人生を選ぶ、ただし、郷土愛があるから最後はふるさとに帰ってきたい、そのような時代になってきたのではないかと思います。自動車もあり、情報もあり、人が動きやすい時代になってきました。地元密着ではなく、例えば「このような施設がある」となると、御嵩町だけではなく他のところから人が集まってくると思います。魅力ある、特徴がある施設を作って、人が流れるようなまちづくりができればいいのではないかと思います。

(町長)

「日本じゃなくてもいいのでは」という言葉と同じように、これだけ通信等が発達しているのだから「東京じゃなくても」「名古屋じゃなくても」というところが、どんどん現れてきてもいいのかなと思います。言葉は悪いですが、そのような方々を拾っていき、そのような方に御嵩町って面白そうだなと思っていただけるようなまちづくりをし続けたいと私は思っています。

最近、芸術の分野では、東京オリンピックについて色々と大変そうですが、水内委員はいかがでしょう。

(水内委員)

今、デザイン業界が非常に大変になっており、色々と考えることもあります。

お話を伺っていると、情報発信が一つのキーになるのだろうなと思いました。コミュニケーションの問題ですが、広告の分野ではインターナルブランディングと、外へ向かっての情報発信の二つを分けて考え、戦略を立てることもしています。行政においても、同じではないかと思えます。色々な施策をされていると思いますが、内部の方たち、つまり住民の方たちにこのようなイベントをやっている、という情報発信ができているのかなと思います。また、それを外に向けたときに、どのようなメッセージを作って、御嵩はこんな町だということを伝えるかという整理も必要なのではないかと思えます。中と外に同じことを言うてはいけないと思えます。外向きには、こういうところとして御嵩を見て欲しい、Iターン者を狙うのであれば、そこに向けての情報発信の仕方がおそらくあるでしょう。その言葉は、内部の住民の方に向けての言葉とは違うものになるはずなので、戦略を立ててメッセージを作っていくことが重要ではないかと思いました。

最近、学生の動向としては、「大企業に勤めたい」、「有名になりたい」、「収入を得たい」というようなモチベーションよりも、「自分の能力を活かした仕事がしたい」、「自分の興味関心があれば小さい会社やベンチャーでもいいので、活躍の場があるところを目指したい」という学生が多い印象があり、面白いなと思っています。大学によっては違うのかもしれませんが、町内に有名なベンチャー企業があれば、それを宣伝していくのも一つの戦略だと思います。

海外の話もありましたが、「東京や名古屋でなくても…」というのは当然のことだと思います。世界の中でも、そのような動きが出てきていると思います。地域が固有な価値を持っているからこそ、世界で通用する時代になってきているような気がします。ボルドー産ワインというのは、そこでしか作れないから、世界中に通用しています。そのようなことは、色々な地域にあると思います。御嵩にしかないものを発掘すれば、それを元に一気に世界とつながっていく可能性のある時代です。リサーチをして、深めていくことが大切だと思います。

(町長)

地域固有の付加価値のあるまちということですね。全てをターゲットにしても無理だろうと私は思っています。例えば、齊藤委員を説得して御嵩に住んでいただくのは、多分時間の無駄だと思います。永谷委員は、価値観として御嵩を選んでくれる可能性もあると思います。御嵩の情報は、齊藤委員はビジネスでは得ようとするかもしれませんが、住む場所として情報を得ようとは思わないでしょう。そのような人をターゲットにするのは無理だと思います。ターゲットをどう

絞っていくかだと思います。最近、少し絞りかけているのですが、そこにどう情報発信をしていくかが大切です。

ずっと情報発信の場で活躍されていた柴田委員はどうでしょうか。

(柴田委員)

情報発信というのは、難しいと思われがちですが、ある意味でいけば、非常に簡単なことです。町のオリジナリティが何かということを深く考えていく、オリジナリティがあれば、他にはない強みになるでしょう。御嵩町のオリジナリティは何だろうかと考え、一番大切なのは何かということだと思います。長く取材の現場にいましたので、何がニュースかということを常に考えながら記事を書くのですが、結局、そこにしかないもの、ナンバーワンよりオンリーワンということに尽きるのかなと思います。ただ、あまりに特徴を出そうとして無理な見せ方をしてしまうと、自分の首をしめかねません。

(町長)

オリジナリティは、これから作っていく部分もあるでしょうし、発掘する部分もあると思います。観光でも、ターゲットを絞っていこうと政策の中に入れていきつつあります。広く情報発信をしていけば、ターゲットと想定している人たちの掴みやすくなると思います。観光でも、中京圏、名古屋圏から電車で御嵩町に来てくれて、一日遊んで帰ってもらえれば、夫婦で1万円くらいの小旅行になるということを紹介し続けていきたいと思っています。最近、御嵩町に外国人の方もよくいらっしゃいます。旧中山道を十何人もの欧米人が歩いています。なぜ、御嵩にはそれほど外国人が来るのかということ、アピールすると、また違った形の日本人の反応が出てくるのではないかと思いつつ、そこから御嵩という町の名前、地域の存在を知っていただければと思っています。

永井委員は、色々な分野で活躍されてこられました。それぞれの個別のまちをみんなに知っていただくためには、どのような方法があるのか、また成功例があるのか、お聞きしたいと思います。岐阜県は全国から行けば知られている県ではないと思うのですが、県としては、その辺りをどのように考えていらっしゃるのでしょうか。

(永井委員)

2年前まで、観光課におりました。そのときに、国内誘客係をさせていただいていました。その時の岐阜県の課題は、名古屋市からの日帰り圏であるため、お金が落ちないことが多いということです。日帰りだと、お昼ご飯を食べての一人当たりの客単価が4,000円くらいです。それが宿泊になると、一人2万4000円くらいになります。日帰りのおよそ6倍です。やはり、宿泊客を増やすことが課題でした。とにかく実績を上げることを厳しく言われていました。そこで、まずターゲットを誰に絞るかを考えました。中京圏からのお客様がほとんど占めています。しかも、車で来られる方が多く、財布を握っているのは女性です。女性が来れば、男性も付いてくるということで、女性をターゲットとしてキャンペーンを行っていました。女性向けにどのように情報発信をしたかという、楽天トラベルと組んで、例えば何歳から何歳までの女性にメルマガを送る、ということをしていました。また、目に留まらない広告ではなく、読んでもらいやすい記事

として書いてもらえるように女性誌に売り込む仕事もしていました。

参考までに、私がしていたキャンペーンで一昨年に作成した「岐阜っぽ。」という冊子の冬号を持って参りました。表紙に写っているのは、県内の42市町村のイケメン公務員です。なぜイケメンを揃えたかという、女性はイケメンが好きだからです。イケメン風の職員が地元のものを紹介する、彼らが「来てね」と言うことで、女性を引っ張ってきたいという企画意図がありました。それまで県の観光というのは、高山や下呂がトップランナーであり、独自に色々とされていたので、県庁なんか関係ないという感じがありました。しかし、このキャンペーンはみんなですべていこうということで、全県でさせていただき、県庁と市町村の距離が縮まったように感じました。ターゲットを絞って、そこに届くように発信をすることが、大事ではないかと思えます。

今、町長さんのお話をお聞きし、すばらしい企業がありますし、私は美濃市ですが、そのような企業があることをテレビで初めて知ったことがありました。連れてきたい方にどういう発信をしてか、そのためにはどこに発信をしていかねばならないのかが大事ではないかと思いつつお話を聞いていました。

(町長)

観光の方まで話が広がっていきましたが、まず御嵩町と他のまちを差別化できるものを、どう紹介していくかが課題だろうと思えます。これが、いわゆるまちの魅力になるのだと思えます。確かに、これから流行するだろうといのは、高校生や中学生が飛び付くものが主流になってきています。また、女性の心をどうくすぐっていくかということも必要になってくると思えます。それに一番近い年齢の齊藤委員はどうですか。名古屋や若い人の情報を、持っていらっしゃるように思いますが、いかがでしょうか。

(齊藤委員)

今の子どもたちは、ネットワークをよく使うので、ネットの口コミをよく見ているイメージがあります。フェイスブックやツイッターから情報を得ているように思います。また、小学校や中学校から色々な企業と一緒に楽しいことをする機会が多いように感じます。例えば、企業で体験をさせてもらえたり、中学校なら授業の一環として地元企業への職場体験等もあります。それがとても楽しかった、やりがいがあった、自分が必要とされたという思いがあれば、将来そこに戻って働こうという気持ちにつながるのではないのでしょうか。工場見学等もありますので、行ってみて楽しければ、学校の中で広がり、ネットの中で広がり、必然的に人が集まってくるのではないかと思います。それを活用しながらやっていると、小中学校、高校生に関しては、情報が広がりやすいと思うので、そういうところを発掘していけば御嵩町の魅力を伝えられるのではないのでしょうか。

(町長)

私が思っている形と、若い人が思っている形が違うように感じます。旅行に行くのにも、今おっしゃられたように、体験や仕事をしたいという人が増えているそうです。高山辺りでは、旅行者がお金を払ってまで職人さんのお手伝いをして帰っていくそうです。その人にとっては、お金を払ってまでする価値があるということですね。付加価値が、我々が想像しているものとは違

ってきていると感じています。水内委員は、若い学生を相手にされていますが、学生はどういうものを追いかけていると感じられますか。

(水内委員)

学生に限らず、我々世代、30代もそうだと思いますが、旅行に行つてスタンプラリーのように名所を巡るよりも、その地域の人たちがどうしているのか、どんなスーパーに行つて、何を食べて、どんなお祭りをやっているか、地元の方たちに溶け込みたいという欲求が高まっていると言われてますし、実際にそうなのだろうと感じます。

学生から、夏休みに旅行に行つた話を聞くと、名所観光地を回らずに、地域のボランティアに行つて草刈りをしたという学生もいました。それが楽しいそうです。草刈りが楽しいというよりは、そこでの交流、地元の人と話をして、一緒にご飯を食べて、地元の話聞くことが楽しいようです。新しい人との出会いを求めているのかもしれませんが、自分たちとは違う価値観を田舎の人たちから求めているということもあると思います。そのような観光スタイルに変わってきていることは確かです。

「ゲストハウス」という形の宿泊施設が注目を浴びていて、全国各地にできているのですが、今までのユースホステルでもなく、安宿でもありません。何が違うかという、一つひとつの部屋は簡素でドミトリーのようになっていますが、交流のためのスペースが充実した形態の施設です。地元の人と交流をしたい、そこに集まってきて、たまたま出会った人たちとの交流を楽しみたいという考えの方がよく利用しているようです。御嵩町にもゲストハウスを運営しようという方がいらっしゃれば、また変わってくるのではないかと思います。

(町長)

我々が旅行に行く場合は、ホテルの玄関に入ってあまり綺麗ではないと「なんだ、このホテルは」とがっかりするような価値観だと思います。しかし、若い人は、欧米の旅行者と同じような感覚になってきているように思います。畳の上に布団で寝たり、寝たときに和風の木の材質の天井を見ることができていいとか、我々が想像できないような人たちが出てきているように思います。そういう意味で、御嶽宿にも雑魚寝でもいいので民泊できるようなところを作っていきたいと思います。当然、昔の街並みも生きてくるでしょうし、山越えの中山道の風情を歩いて体験していただけたらと思います。今は、宿泊地が完全に瑞浪市の方になってしまっているので、もったいないという気がしています。

価値観が変わってきた学生を相手にされている小林委員はどうでしょうか。

(小林委員)

私自身は50を超えていますので、町長と一緒に今の学生の価値観の違いに驚いているところです。私だったら、高山に行きたいと目的ありきになるのですが、今の学生は、ゲストハウスに近いとか、体験をしたいということが先にあり、それで調べてみると、御嵩町だったという感じで動いているように思います。地域に根付いている行政の方からすると、自分のまちに来てほしい、住みついて欲しいと思っていらっしゃるのだろうと思います。しかし、今の若い人たちは、住む場所も含めて、自然に触れ合える幼稚園に行かせようと思ったらたまたま御嵩町だった、英語に

力を入れているからあの小学校に行こうと思ったら可児市だった、じゃあ引っ越そうとなることが多く、「このまちだから」というのは感じません。学生の中でも、価値観がバラバラで多様性があるように思います。雑魚寝でいいような観光に行きたい人もいれば、とにかく汚いところは嫌で、綺麗なベッドで寝たいという人もおり、色々な価値観があると思います。決め打ちというよりは、まちの魅力を全面に出すようなアピールをすれば、それにカチッとハマる人が必ずいると思います。そのような人をターゲットにすればいいのではなんでしょうか。学生を見ていると、汚い格好で旅行に行ってしまう女子学生もいれば、綺麗なホテルに泊まるのが大好きな男子学生もおり、男女関係なしに価値観がバラバラだと非常に感じます。

(町長)

私は思いつきで話をしているのですが、作業をする場を、こちらが旅行と称して作っていくことにも魅力があるのかなと思います。今、森林の整備をしているので、例えばこの辺りの木を100本切るの、一人1本どうですかというやり方をすれば、それはそれでやりたいという人が出てくるのではないかと思います。安全対策等、色々なことを行政として考えていかねばなりません。ノリのようなところを取り入れて、最後は人間関係になってくると思うのです。そういう意味でアイデアを凝らしていきたいなと思います。

教育から外れてしまいましたが、名古屋市の中でも、同じ公立高校でも人気のある高校、小中学校、地域があり、そこへ子どもを持った若い夫婦が住む傾向があると聞いたことがあります。昨年からの娘も名古屋に住んでいます。家を建てるところをどこにするかの基準が、小学校のレベルから選択していると聞きました。私は教育に特に力点を置くとやっているのは、成績もそうですし、覚えることは覚えても、それを使えない、考えることができない人間が多くなっていると感じているためです。名古屋市の傾向を分析すると、教育のレベルが地域や学校によってそこまで違うのかという印象があります。御嵩町と可児市でいうと、町は教育レベルが低いのではないかと若いお母さんがいます。だから可児市がいいのではないかと簡単に言われてしまうと、それはいかなものかという思いがあります。

入学前の子どもたちを見ていらっしゃる齊藤委員は、どうお考えでしょうか。

(齊藤委員)

名古屋市は、元々住んでいる方が、わざわざ他の地域に行って小学校や中学校に通わせようとはなかなか思わないです。新たに名古屋市に来られた方で、引っ越そうと思っている親御さんたちは、小学校というよりは中学校のレベルを非常に重視していると思います。20年前、30年前までは、荒れる中学校が多く、ここの中学校に行くと、子どもがいじめられるのではないかと、校内暴力があって大変ではないかということから、少しずつそのような傾向になったのではないのでしょうか。中学校のレベルが低いと、行ける高校が制限されてしまいます。名古屋市内の高校は、上から下までレベルの差が激しく、行く高校によって将来の進路もある程度絞られます。どうやって大学に行って、働いて、将来どんな職業に就くのかも、限定的になってきてしまっていると親御さんたちは感じるようです。中学校、高校に行った段階で、どの程度の企業に勤め、どの程度の人生を送れるのかを、親が先にイメージをしてしまっているのではないかと思います。今の子どもたちは、自分たちで考えて将来を決めるという教育を受けているように思いますが、自分た

ちがいいことをすれば褒められる、そして、褒められないとなかなか育たない、自分たちで「私たちは褒められることが好きなのです」と言えてしまうような世代だと思います。人から評価をされることが、自分にとって一番いいと感じているように思います。それこそ、まちや人を作る時も、一人ひとりが誰かから認められるとか、求められるというのが、すごく大切な要素なのではないかと思います。教育をする上でも、認められる、褒められると、よく言われるのですが、私は時には失敗をさせることも大切だと思います。今の保護者の方は、あまりにたくさん失敗をさせることよりも、色々なことが認められ、褒められて、成功体験をさせて欲しいと言う風潮にあるようです。そうではなく、失敗の中から学ぶこともあるということ、少し理解してもらえると、教育の質が変わってくるのではないかと思います。そうすると、若い世代の人たちが少しのことで仕事を辞めてしまうことも減っていくのではないのでしょうか。その辺りを行政からも、もっと親御さんたちにアピールをしていただきたいと思います。

(町長)

「褒められたい」を勘違いした子が、逆に大人になって、あれがやってみたかったとか、目立ちたかったということから、犯罪につながってしまうこともあるのではないかと思います。そういう大人が非常に多くなっています。昔は、事件が起きると、被害者側にも理由があったということが多かったように思いますが、今は出会いがしらのような被害者が多くなっているのです。事件が教育を発端に始まっているとしたら、考えていかなければいけないと思います。

まだどうなるかは分からないのですが、資料3で示している先行型上乘せタイプということで、子どもたちにタブレットを持たせて、一つは環境教育、一つはロボットからのアプローチをしようかと考えています。これらと外国語、英語をリンクさせていくことも視野に入れていかねばならないと思っていますが、永井委員、色々な分野で活躍されていられていますが、使い方のアイデア、提案は何かありませんでしょうか。

(永井委員)

今、私はこの分野からは遠いところにおりますが、子どもの教育や小さくても個性がある優秀な企業等、知的産業的なものに投資されるのはいいことだと思います。前は出席できなかったのですが、御嵩町の統計資料を見せていただくと、やはり製造業が多いですし、可児工業団地の中の大きい企業だけではなくて個性ある小さい企業を育てていくことが大事ではないでしょうか。そこへ将来的に就職したいという子を少しでも増やすために、ターゲットを絞る等、御嵩町でも知的産業の分野について少しずつ底上げすることがいいのではないかと思います。

(町長)

委員の皆さんは、誰もご存知ないと思いますが、東濃高校はかつての旧制中学です。今は、大変レベルが下がり、困った状態になっています。しかし、レゴのロボットを組み立てる部活を頑張っており、毎年、世界大会に行っている程のレベルです。世界大会では、ほぼ、日本がトップ3に入っています。ただロボットのパーツを組み立てていけば形はできますが、どう入力してどう動かせるかという技術を競うため、ロボットを作る技術だけではなく、柔軟性が必要になります。柔軟性は、他のどの分野でも役立つ力になるのではないかと思います。御嵩町は、夏休みに

子どもたちを対象にロボットの製作セミナーを実施しているのですが、非常に興味深く思ってくれる子どもが多く、親御さんも楽しみにしていてくれます。

今の若い職員や従業員たちと、今まで自分が経験してきた従業員のあり方の違い、そのようなことを感じることはありますか。また、このような分野に強いと仕事に役立つということ等ありますか。谷口委員いかがでしょうか。

(谷口委員)

若い世代とのジェネレーションギャップについては、つくづく感じます。20代の社員と接する中で感じるのですが、我々はこうあるべきだということについて、任務を負って遂行するという教育を受け、事実、そうやってきたのですが、若い世代にこうやりなさいと言っても、すぐには実行しません。こうやりなさいと言うと、「それってどうなの」とまず考えるのだと思います。自分が納得することについては、そこまでしなくてもいいのにというくらい仕事をするのですが、納得のいかないことについては、仕事をしないというのは大げさですが、怒られない程度に済ませておくというのが実態かと思います。

我々とは育った環境が違うのではないかと思います。若い社員は、可能性がたくさんあり、教育水準もいいのですが、実際に働いてみると、楽しいことをやりたいよね、仕事って楽しくないと続かないよねというのが本音かと思います。気づく機会を与えることが大切ではないでしょうか。先ほどのロボットの話もそうですが、御嵩町にいて世界一の話がここで聞けるということは素晴らしいことだと思います。幼児教育から始まり、20代、大学生、社会教育も含めた中で、そのような機会がたくさん与えられるようになれば、たくさんの人が寄ってくる仕組みができると思います。御嵩は人づくりが違う、御嵩町に来ると違う体験ができる、そのようなことができる、楽しいまちになるのではないのでしょうか。

先ほど見せていただいた資料の「岐阜っぽ。」の表紙ですが、楽しそうですね。行政も住民もみんなが楽しいとすることができる仕組みを作っていければと思います。私も仕事をしていて「苦労したよな」「つらかったよな」と育ったのですが、今は、それでは駄目だろうなとつくづく思います。

(町長)

言葉の使い方が変わっただけかなという気もします。しっかりと仕事ができ、「数字が上がった」「人が多く来てくれた」となるか、それとも「苦労したよな」と言ってしまうかの違いでしょうか。結果として自分たちが一生懸命やったから、みんなが来てくれて、一緒にやれて楽しかったとポジティブにいくか、それともネガティブになってしまうかの違いではないかと思います。ただ、楽しいをはき違えると困ったもので、何でもかんでも楽しくやっていけるかと言えば、そうでないと思います。子どもたちには、一つのことを突き詰めてやってくれ、必ず継続させてやってくれ、とよく言っています。スポーツなんて苦しいときばかりですよ。何もいいことがない、ただ、野球ならヒットを1本打てたときの喜びというのは、やっていた人にしか分からないものだと思います。そこを教育の中で、はき違えないように教えていくことも大切ではないかと思います。

今日は、「ぽっぽかん」で開催させていただくにあたり、色々なデータを見ておりました。黒田

委員にお聞きしたいのですが、一週間ずっと働き詰めではなく、ワークシェアリングとして2人で1人のポストという形での工場運営はできないのでしょうか。今、4、5人を預かる小規模の無認可保育園が出てきています。収入が欲しい、外へ出て気分を変えたいと思う女性は多いと思います。そこで、例えば、子どもを持っているお母さん同士が、1週間のうち、半分ずつを東海化成さんで仕事をするというような勤務形態はできるのでしょうか。

(黒田委員)

可能だと思います。東海化成は、モノづくりの会社ですので、現場でモノづくりをする仕事と、事務の仕事があります。特に、事務については、育休を取られる方や、育児のために短時間勤務をされている方が常時1、2人おられます。そのような部署については、必ずバックアップできるような形で組み合わせてやっています。現場についても、今、町長がおっしゃったような勤務形態は実施しておりませんが、同じような考えで、24時間稼働の工場では、昼間勤務と夜間勤務を交互にするため、昼勤しかできない主婦の方がいる一方で、短時間で稼いで帰りたいという外国人の方もいます。夜勤専門でやりたいという方もいますので、そのような組み合わせのラインはあります。曜日をきちんと決めて、交互に勤務されることについては問題ないと思います。ただ、1週間のうち5日間は必ず埋まるようにしなければならないため、それが可能なら問題ないと思います。

(町長)

突き詰めて調べながら考えたわけではないのですが、1日おきに子どもを預かる日と、自分が仕事をしに出てく日があれば、子育て中でも外へ出ていける機会が増えるのではないかと思います。お母さん方は、核家族で相談できる人が身近におらず、心細い部分があったり、ストレスもたまっていると思います。また、経済的にも短時間で働きながら小遣いを稼げるような場を提供すれば、仕事も長続きするのではないかと思います。一度、実現できそうかどうかを考えてみたいですね。

あちこちに、話が飛んでしまいましたが、いずれにしても、御嵩町に魅力を感じていただけるようなことを考えていかなければならないことは明白です。ただ、どの市町村でも出てくるのは同じようなものだと思うので、そこで、どう個性を出して差別化していくかがテーマになるでしょう。では、最後に、柴田さんにまとめていただきたいと思います。

(柴田委員)

今日は、子育ての問題等、色々な話が出ました。私は今、ウェブの学校の手伝いもしています。生徒に日系ペルー人で、17歳くらいで日本に来て、今28歳の方がいます。一番上の子どもは8歳で、その下に3歳と2歳半のお子さんがいらっしゃいます。その方が最近何日か続けてお休みされることが多く、心配していましたが、真ん中のお子さんが風邪をひき、下の子にうつり、夫が物損事故を起こしたということでした。子どもを預けるのも大変なのに、夫が事故をしたので、とても学校に来られる状況ではなかったということでした。その上、4人目を授かったということで、お母さん自身が本当に大変な生活をしながらも、勉強をしたいという気持ちを持っていらっしゃいました。

日本の制度は働く女性に必ずしも優しくない社会だなと実感しました。今回は、子育て支援施策、教育施策を中心というテーマだったかと思います。一つひとつ、個別の交付金のために色々な事業が出ていますが、バラバラにやっても、現場の職員の方々の仕事が増えるだけで、疲弊感が増すだけではないかと思います。それらの事業を一つにつなげていくことが大事ではないかと思いました。そうやってつなげていくことが、この会議の役目ではないかと感じました。そのような方向で実のある会議になればいいなと思います。

(町長)

経済的な理由だけではなく、生きがいという意味には多様性があり、仕事に生きがいを感じられることもあれば、子育てに生きがいを求める場合もあると思います。また、全部を合わさった生きがいを求められている方もいらっしゃると思います。子育てをしながら働いているときの一番の問題が、病児保育と長期休暇の対応です。どう行政が手を差し伸べることができるかが問題だということは、おぼろげには見えています。その辺りを解き明かしながら、住みやすい、子どもを育てやすいまちであるということが、一番の条件だと思いますので、そのようなことも含めて皆さんに議論をしていただきたいと思います。

経済的な理由でいけば、国の方針なので、それをどう守りつつ対応していくかだけだと思います。小泉政権の際に、国立大学を法人化し、授業料が倍以上になったということがありました。子育てに関して言えば、時代に全く逆行している非常に悪い制度だと思います。子育て支援の観点からいくと、本来は大学を無料にするのが一番です。入れても卒業するのが難しいところにしていくのが、本筋ではないのかなと思います。自分の経済力で子どもを何人大学に行かせることができるのが、子どもを持ちたいと思っている人のテーマだと思います。単純に収入が基準になってしまうと、子どもは1人でいいとなってしまいます。御嵩町には住まないと言っている人に住んでくれと言うのと同じで、子どもを持たないという主義の人に子どもを持つことの良さを説くよりも、持っている人に対してもう一人産みやすい状況を作っていく方が、答えが早く出るのではないかと考えています。

また、もう一点、年金支給が遅くなったことがネックになっていると思います。戦力として65歳まで働けるならば、支給時期が遅くなくても支給される側には問題はありません。ただ、そのポストは本来なら若い人が行くところであり、頭を押さえつけている形になっている場合もあります。経済的な意味で、働き場所に関しては、非常に冷たいやり方だと思います。逆から見れば、高齢者には優しいのかもしれませんが、現役世代には厳しい状況になってしまっています。このようなことが、子育て世代のネックになっているのではないかと感じています。

第3回目の会議では、もう少しテーマを絞って進行したいと思います。事前にお知らせいたしますので、ご意見をまとめつつ、来ていただければありがたいです。本日は、ありがとうございました。

(事務局)

ありがとうございました。今、町長がお話しましたように、次回は移住定住につながるもの、あるいは観光資源として売り込めるもの、農業等も含めた仕事についてを中心に、テーマを決めさせていただきたいと思います。

次回の開催日につきましては、10月5日（月）午後3時からを予定しております。会場等は改めてご案内いたします。

本日は、長時間に渡りご議論いただき、本当にありがとうございました。これを持ちまして、「第2回目みだけ有識者会議」を終了させていただきます。

以上